

エクトール・マロとエミール・ゾラ
—精神病者に関する法（1838）と文学—

梅 澤 礼

富山大学人文学部紀要第 68 号抜刷

2018年2月

エクトール・マロとエミール・ゾラ

—精神病者に関する法（1838）と文学—

梅 澤 礼

序

1810年の刑法典は、犯行時に心神喪失状態にあった者は処罰しないことを定めていた。しかしその後も、罪を犯した精神病者は犯罪者と混同され、監獄に送られつづけていた。こうして1838年、精神病者に関する法（loi sur les aliénés）が制定された。この法律は精神病者を監獄から解放するべく、入院手続きを簡略化することを表向きの目的としていた¹⁾。これ以降、1人の医師の診断書と県知事の承認さえあれば、精神病者は本人の意志に関係なく入院させられることとなった。つまり、精神病者が事件を起こす前に、彼らを強制入院させることが可能となったのである。1840年代、50年代と、フランスの精神病院人口は増加していった。

とはいえ入院させられたすべての人間が、本当に精神病に罹患していたわけではなかったようである。たとえば1863年には、レオン・サンドンの事件が発覚している。サンドンは同僚の策略にはまり、いたって正常であったにもかかわらずモノマニーと診断され、精神病院に閉じ込められていたのである。この事件がきっかけとなり、1860年代後半にかけて、精神病者に関する法をめぐる論争が精神科医やジャーナリストの間で繰り広げられることとなった。

作家たちもこの論争に無関心ではなかった。1869年には、のちに『家なき子』で世界的に知られることになるエクトール・マロが、『義兄弟』という小説で強制入院の問題を取り上げている。また自然主義作家エミール・ゾラの『プラッサンの征服』（1874年）でも、登場人物の一人が精神病院へと送られている。これらの作品において、個人の狂気や精神医学の権力はどのように描かれているのか。1838年の精神病者に関する法は、一世代後の文学に何をもたらしたのか。

1. 精神病者に関する法をめぐる 1860年代の論争

精神病者に関する法をめぐる1860年代の論争では、サンドンの事件がきっかけとなったこともあって、制度が悪用されることがまず懸念された。『シエクル』紙は次のように訴えている。

これもまた同じくらい大きな不幸ではないだろうか。親類の誰かによる下心ある策略の結果、そしてたった一人の医師の間違いによって、無害で精神も正常な一人の人間が狂人の

施設に閉じ込められてしまうとしたならば²⁾。

この記者はサンドンのようなケースがほかにもあるのではないかと考えている。しかも精神病院に入院した者は禁治産になることから、相続人の間で策略がめぐらされる可能性も示唆しているのである。

しかし精神科医たちはといえば、ほとんどが法律を擁護する側に立ち、表立って反対したのはレオポルド・チュルックという医師だけだった。そのためチュルックは、ほかの医師たちから、問題がよくわかっていないのだとか、「幻想的理論家だ³⁾」などと批判された。たしかに議論のなかでチュルックが用いた論理や言葉は、医学的なものとはかけ離れている。たとえば彼は言う。

精神病院に関する1838年法は、その不十分さゆえに、それら精神病院の一つ一つを小型のバスチーユにしてしまい、そこでは封印状が、政府から出されるかわりに、貪欲であったり恨みを持ったりしている親族によって差し出されかねないのだ⁴⁾。

チュルックは精神病院をバスチーユ監獄に、医師の診断書を国王の封印状にたとえている。バスチーユ監獄とは、アンシャン・レジーム期に存在した政治監獄であり、封印状は、政敵や密告された臣民をその政治監獄に幽閉するべく国王が送ったものである。つまりチュルックは、精神病患者に関する法と旧制度の悪習とを重ね合わせているのである。チュルックにかぎらず、パリ市会議員であったJ・マニエも『現代のバスチーユ』という著作で強制入院の制度を攻撃している⁵⁾、サンドンも『自由への道』と題された手記を出版するなど、絶対的権力の犠牲者としてふるまっていた⁶⁾。

だがチュルックは、精神病患者に関する法に反対するにあたり、医学的な根拠も示している。それは、精神病患者と一緒にいるうちに正常な人間も理性を失ってしまうという、精神病の伝染性を理由とするものだった。精神病が伝染するというのは、現代のわれわれからすると単純な考えであるように思えるが、当時は多くの医師が認めていたことだった⁷⁾。

こうした議論のさなかに出版されたのが、マロの小説『義兄弟』だったのである。

2. マロの『義兄弟』

『義兄弟』という作品について、マロはのちにこのように語っている。

『義兄弟』の概要は、このうえなく単純なものであり、数行で要約することができる。

「精神の正常な一人の男がいるのだが、親類は彼を狂人だということにすれば利益がある。

こうして男は精神病者の施設に閉じ込められ、そこで狂ってしまうのである⁸⁾。」

マロがまさに『シエクル』紙の記者やチュルックが危惧していたような状況を描こうとしていたことがわかる。

主人公は、セネリ・デチュルクレという貴族の青年である。彼にはシプリエンヌと呼ばれる恋人がおり、彼女との間に生まれた私生児を近く認知しようとしている。この幸せの前に立ちはだかるのが、セネリの義理の兄にあたるフリアルデル男爵である。男爵は野心家で、近く議員に立候補しようとしているのだが、セネリに対して多額の借金があり、立候補のための資金もままならない。そこで男爵は義理の弟であるセネリが発狂したことにしようとする。そうすれば、セネリは精神病院に入り、借金はなかったことにできるうえ、財産も自分のものになると思ったからである。すべては男爵の策略通りに進み、セネリはついに精神病院に入院させられてしまう。この精神病院はある神父の善意で建てられたものであるが、神父も、それから医師たちもセネリのことを狂っていると思い込み、彼の訴えを聞いてはくれない。結局友人やシプリエンヌの奔走によってセネリは釈放されるのだが、そのときすでに彼は迫害妄想にとりつかれており、ほどなく自殺してしまう。最終的に義理の兄である男爵の借金は帳消しになり、彼は議員選に出馬する。結末部分では男爵の心のうちが描かれる。

もし精神病者に関する1838年の法律が議会で非難されたならば、男爵は法律のもっとも激烈な反対者の一人になろうと決心している。その法律の理論によってのみ反対するのではない、彼にはその法律と闘う独自の、個人的な事実があるのだ。不幸な義理の弟がその法律によって狂わされたという事実が⁹⁾。

『義兄弟』のあらすじと上の引用からは、この作品が精神病者に関する法への反感から生まれたものであり、強制入院に対する人々の懸念をそのまま表した、マロの言うとおりの「このうえなく単純な」ものであったことがわかる。

実際、精神病者に関する法をめぐる議論の影響は、この作品の節々に見ることができる。たとえばセネリは、自分を閉じ込めている精神病院のことを「精神のバスチュー¹⁰⁾」と呼んでいる。同じように、彼は恋人に宛てて次のようにも書いている。

精神的な拷問、移動の間、鎖につながれて、憲兵2人にはさまれて、僕のことを狂人たちと閉じ込めようとしているのだということを知りつつ、僕が耐え忍ばなければならなかった精神的な拷問は、肉体的な拷問よりもおそろしいものではないだろうか¹¹⁾。

ここで繰り返されている拷問という言葉にも、当時の人々にとって強制入院の制度がアンシャン・レジームを想起させるものであったことが反映されている。

また、病院に入れられたセネリは、攻撃性が高いと診断されて一時期独房に入れられるのであるが、彼の代訴人は神父のもとに向かい、「これではまさに密房拘禁ではないか」と問いつめる。密房拘禁とは、やはりアンシャン・レジーム期に存在した罰である。ところが神父はこれに対して、「そんな言葉は知りません。これは隔離です」と答える¹²⁾。主人公の置かれた状況を大革命前の制度になぞらえて批判する代訴人と、それを隔離という現代の医学用語で正当化しようとする神父とのこのやり取りは、精神病者に関する法に反対する人々と賛成派の医師たちとの論争の特徴を、登場人物の会話の中に集約したものであると言えるだろう。

こうして病院にいる間にセネリは迫害妄想を抱くようになってしまうのであるが、何が直接的なきっかけとなったのか、そしてどのような妄想だったのかについては、詳しく描かれていない。というのも、小説を執筆するにあたり、マロは同時代のほかの作家たちのように、専門資料に頼りはしなかったからである。しかし狂気にとらえられる人間の恐怖は、作家ならではの想像力と技巧をもって描かれている。セネリはひそかに紙を用意し、恋人に助けを求めるのであるが、そこにはこのように書かれているのである。

A) 僕のように、狂人ではないのに閉じ込められている者たちはどうだろうか？医者たちが狂気は伝染するものであると指摘しているかどうかは知らないが、僕にはこれほどかかりやすい病気はないように思えるし、この病気をもらうにはただ見さえすればいいだけのように思える¹³⁾。

実際には精神病の伝染は医師たちも認めていたわけであるから、作者は彼らの責任を暗に追及していることになるのだが、作者の手を離れて一人称で語り出した当事者のセネリはといえば¹⁴⁾、時間がたつにつれてその狂気への恐怖をつのらせてゆく。

B) 彼（別の入所者）は、ここに入ってきたとき狂ってはいなかった、狂ってしまったのだ。それにはどれだけ時間がかかったのだろう？冷たい汗が僕の背中をぬらした。未知のものを恐れぬ人間は幸せだ！おまけに僕の目の前で身振り手振りし僕の耳元で叫ぶこの不幸な連中、どうしたら彼らを見ずに、彼らの声を聞かずにいられるだろう¹⁵⁾？

ここでもセネリは精神病の伝染について語っているのだが、A) の引用が客観的であったのに対し、B) の引用はより主観的で、より感情的であることがわかる。また、A) の引用では精神病患者たちはセネリによって「見られる」客体であった。これに対し、B) の引用では彼ら

はいつの間にかセネリの「目の前に」まで進んできているばかりか、「耳元に」まで迫って「叫んでくる」主体となっているのである。マロは主人公自身に語らせることによって、彼だけでなく読者をも精神病患者で取り囲み、彼の差し迫った恐怖と、失われつつある主体性、失われつつある理性を、読者にも共有させているのである。

『義兄弟』が今日ほとんど知られていないのは、精神病者に関する法の議論を小説に当てはめただけとみなされているからだろう。たしかに、あちこちに散りばめられた論争のキーワードや、あまりに戯画的な神父の姿、そしてなにより作者の言うように「このうえなく単純な」筋は、そのように感じさせるかもしれない。しかし、「このうえなく単純な筋」であり、結末があらかじめわかっているからこそ、繰り返し現れる論争のキーワードは、当時の読者に、来たるべき結末に対する不安と、怖いもの見たさに似た好奇心を煽ったのではないだろうか。一つの制度に対する人々の危惧と、それを抑え込もうとする医学の言説とが取り込まれた文学作品『義兄弟』の価値は、発表当時のコンテクストないしはコテクストに置かれて、はじめて現れてくるということになるのだろう。

3. ゾラの『プラッサンの征服』

それから5年後の1874年、ゾラは『ルーゴン・マッカール叢書』の第4巻として『プラッサンの征服』を発表した。これは第1巻『ルーゴン家の誕生』に続く物語であり、第1巻で狂気に陥ったアデライード・フークの孫にあたる、フランソワ・ムーレとマルト・ムーレの夫妻が登場する。しかし妻のマルトは神経の発作の末に肺結核で死亡、夫のほうはといえば、正気であるにもかかわらず祖母と同じ病院に入院させられ、やがて本当に精神を病み、自宅に火を放って焼死してしまう。

アンリ・ミットランは、この物語が、ゾラが1862年から72年にかけて3度発表した新聞記事「ある狂人の物語」を発展させたものであると指摘している¹⁶⁾。「ある狂人の物語」では、妻とその恋人の共謀で、ある夫が精神病院に送られる。1年近く経って、恋人と別れた妻が精神病院の夫を訪れると、夫は次のようなようすで彼女を迎えるのである。

夫の独房に連れてゆかれた彼女は、影になった片隅に一人の亡霊が、汚くて、痩せて、青白い獣が、ゆっくりと立ち上がり、彼女のことをそのくぼんだ目で、愚鈍そうに、仰天したようすで眺めているのを見た。彼女には、それがあの好人物だとは思えなかった。そして彼女がそこに、怯えて立ち止まっていたものだから、彼は間抜けな笑いを浮かべて、体を揺らしはじめた¹⁷⁾。

夫は病院の暗がりから「ゆっくりと」起き上がり、「愚鈍そうに」こちらをじっと「眺める」。

そして彼女が動かないのを見て、笑いながら「体を揺らしはじめる」。時間の経過を感じさせる表現と、夫の詳細な描写によって、彼の狂気は時間をかけて少しずつ明らかになり、妻と、そして読者の恐怖をかきたてるのである。同様に『ブラッサンの征服』でも、ムーレの発症は精神病院で、それも妻の目の前で発覚しており、ミットランの言うとおりの「ある狂人の物語」が一部でもとになっていることは間違いないだろう。しかし、マロがやはり同じころ、強制入院と精神病の発症を『義兄弟』で描いていたことにミットランはふれていない。

とはいえ、ゾラとマロという2人の作家の関係については、これまでも先行研究の対象になってきた。ミットランも、『ブラッサンの征服』のフォージャ神父のモデルが、マロの『田舎の司祭』(1872)という作品の主人公ではないかとしているし、フレデリック・ヘミングズも、ゾラの『ジェルミナル』(1885)よりも前にマロが『家なき子』(1878)で炭鉱事故を描いていること、また、ゾラの『壊滅』(1892)とマロの『疾病兵の回想』(1872)におけるパリの描写が似ていることから、ゾラはマロからインスピレーションを受けていたのだらうと結論している¹⁸⁾。ということは、ゾラの『ブラッサンの征服』とマロの『義兄弟』でともに強制入院と精神病が描かれていることも、2つの作品のなんらかの関連性を示しているのではないだろうか。

じつはゾラ自身、マロがすでに同じ状況を描いていることは意識していたようである。ゾラの草稿は下書き(ébauche)とプラン(plan)とに分かれているが、このうち下書きのほうが先に書かれ、プランはあとに書かれたものになる。その最初の草稿にあたる下書きで、ゾラは次のように書いている。

ムーレは狂人の施設に連行される。この部分をどのように発展させるべきか検討すること。とはいえ狂人の施設を描いたり、どのようにムーレが彼自身狂ったのかを示したりする必要はないと思う。それはマロの小説の中にあった。見ておく必要があるだろう¹⁹⁾。

ゾラは、登場人物の入院と発狂について、まだどのように書くか決めかねているとしたうえで、「マロの小説」に言及しているのである。草稿を編集したコレット・ベッケルらは、これがマロの『田舎の司祭』と『ある奇跡』(1872)のことであるとしている。おそらく、『ブラッサンの征服』プレイヤッド版の注における、ゾラが参考にしたのはこの2作品だというミットランの断定に基づいてのことなのだろう。しかし、上にあげられた2作品の中で、マロは精神病院や病の描写は一切していない。むしろ内容から考えて、ゾラが草稿で言及している「マロの小説」とは、『義兄弟』のことであると考えるのが自然ではないだろうか。つまりゾラは、マロが精神病院や病の発症を詳細に描いたことにふれ、だから自分は細かく描くまい、という意志を下書きで表明しているのである。そのため、精神病院に入れられたムーレの発症の場面については、簡単な素描のみ残したのだった。

A) ①彼女、妻は精神病院に行く。②すべてを話し、夫の足元に身を投げ出し、許しを請おうという考えで。③まず彼と会話、と不意に狂気がむき出しになる、彼は狂っていたのだ、④彼女は恐れて後退りする²⁰⁾。

だが、マロに先を越されているから描けないという状況は、ゾラに制限だけでなく発展ももたらすこととなった。『ブラッサンの征服』の草稿のうち、あとに書かれたプランでは、同じ場面が次のように描かれている。

B) ①マルトはムーレに会いにチュレットに行く。③彼との理性的な会話、その後、狂気がむき出しになる。④マルトの驚愕と絶望。②彼女は彼を連れ帰りその助けを得てフォージャを追い払おうと思っていたのだ。ひとりではフォージャが怖いのだ。ここで読者が思ってもいない衝撃的な場面がなければならない。読者はムーレは狂ってなどいないと信じているはずだ²¹⁾。

B) の引用の下線部が、A) の引用の下線部にほぼ対応し、それぞれ発展させられていることがわかる。しかし、B) の引用には、A) にはなかった2行が加わっている。それは、ムーレが狂っていることを知らない読者に対して、これをひとつの衝撃にしようという注意書きである。すでに確認したように、マロは狂人に囲まれた主人公のようすを、主人公の手紙の形で、つまり一人称で日を追って描いていた。これによって読者は、彼が理性を失ってゆくようすを追うことができたのである。そのマロを意識し、精神病院でのムーレを詳しく描くまいとしたゾラは、ムーレが描かれず、読者の注意も離れるからこそ可能となる、衝撃的な展開の創出を、プランの段階で思いついたのである。

このことをふまえて作品を読むと、従来のような「ある狂人の物語」との比較だけでは浮かんでこない、『ブラッサンの征服』最終稿におけるゾラの巧みな場面展開が明らかになってくる。まず、祖母のアデライドが入院し、やがてムーレが入院させられることとなる精神病院は、近くに住んでいるアルコール依存症の叔父マッカールとともに、物語に冒頭から暗い影を投げかける。

等間隔に並んだ小さな窓によって、黒い柵のついた建物の面がきわだち、中央棟全体が病院特有の、生気のないがらんとしたようすを見せていた。「あれは精神病院さ。」マルトの視線の先を追っていた叔父がつぶやいた。マルトは黙りこくっていた。唇からは血の気が失せ、目は示された窓に、意思に反してくぎつけになっていた²²⁾。

祖母からの遺伝を恐れているマルトにとって、この精神病院は不気味な引力を発している。そのマルトの目を通して精神病院を眺める読者も、同じような印象を抱くことになるのである。

やがてマルトは神経の発作を起こすようになる。ところがマルトではなく、ムーレが狂っているとの噂が立つようになる。人々は医師に「報告書²³⁾」を書くことまで勧める。ムーレを強制入院させるにあたっての診断書である。そしてムーレは、すべてが噂であるにもかかわらず、マルトが恐れていたあの精神病院へと送られるのである。

その後、作品の中では、ゾラ自身プランで述べていたように、精神病院でのムーレには一切ふれられない。ムーレが連れてゆかれたあとは、あたかもほかの登場人物は、さらには作者でさえも、ムーレのことは忘れてしまったかのように物語は進む。そしてしばらくして妻のマルトが面会に行くと、ムーレは陽気に彼女を迎えるのだが、その姿は以下のように、突如として変化するのである。

ムーレがおしゃべりの途中で、まるで激しく殴られた獣のようにぐるりと回転したところだった。彼は床に寝そべった。それから四つ足で、壁に沿って軽やかに歩いた²⁴⁾。

かつてマロが主人公の発症を、一人称で主観的に、少しずつ描いていったのに対し、ゾラは三人称のまま、狂ったムーレを突然読者の目の前にさらすのである。しかもその描写も、「ある狂人の日記」に比べるときわめて短いばかりか、「ぐるりと回転し」「四つ足で」「軽やかに歩く」というふうに、時間の経過を一切感じさせないものになっている。これにより、ゾラがプランで着想した衝撃がいっそう強められていることがわかる。

だがこうしたムーレの描写は、いくらマロとの差異化と読者への衝撃のためとはいえ、ゾラにしてはあまりに単純ではないだろうか。とくに、マルトの症状が精神科医ユリス・トレラの『明晰なる狂気』（1861）をもとに細かく描写されてきたことを考えれば、不自然にさえ思えるかもしれない。しかし、精神病を発症したムーレのこの簡素な描写は、作品に2つの効果をもたらすことになる。ひとつは、それまで町を悠々と散歩していたムーレがいきなり四つ足で歩き始めたことによって、物語は衝撃を受けるだけでなく加速する。こうして、すべてを一気に破局へと向かわせる、狂気と遺伝の抗いがたい力が表現されているのである。もうひとつは、ムーレの狂気が、マルトの発作が引き金になったものなのか、もしくは祖母から受けた遺伝にあるのか、それとも当時話題となっていたように精神病院に入れられたことにあるのか、あらゆることが不明であることに由来する。この、もやがかかったような状況の中で、狂ったムーレは、そのムーレを閉じ込めている精神病院は、さらにはその精神病院を象徴する物言わぬ祖母アデライードは、不可解で、それだけにいっそう不気味な存在となるのである。精神病院の

中から作品世界を無言で見つめて揺り動かす狂気と遺伝の力を、ゾラは精神病の発症をあえて描かないことで雄弁に描き出したと言えるだろう。

結

精神病者に関する法（1838年）をめぐる1860年代の議論に触発され、マロは『義兄弟』を執筆し、主人公が強制入院先の病院で理性を失うようすを描き出した。この議論に同じく関心を示し、「ある狂人の物語」という記事も発表していたゾラは、マロに先を越される形となってしまった。そこでゾラは『ブラッサンの征服』で、登場人物の強制入院から精神病の発症までを、マロのように詳しくは描かないことに決めた。その決断は、この場面を衝撃的なものにするとともに、『ルーゴン・マッカール』叢書全体を貫く狂気と遺伝の力をよりいっそう強力なものとして描き出すことを可能にしたのだった。

ゾラがたびたびマロを称賛し、マロから靈感を受けていたことは先行研究によって示されている。『ブラッサンの征服』も、やはりマロの『義兄弟』をきっかけとして大きく発展したと言えるだろう。しかしそれは、先行研究の言うようなインスピレーションよりももっと複雑なものだったのかもしれない。というのもゾラはこの4年後、マロの制作が『義兄弟』周辺を境に安易なものになったと指摘しているからである²⁵⁾。『ブラッサンの征服』においてゾラがマロとの差異化をはかったことは、マロの着眼点に対するそれまでと同様の評価だけでなく、そうした着眼点を活かしきれていないように思えるマロに対して生まれ始めていた、一種の反感のようなものの表れでもあったのかもしれない。

マロはといえば、『義兄弟』出版ののち、精神医学界から強い批判を浴びることとなった。医師のアシル・フォヴィルも、マロは想像力にのみ頼り、医学的真実には無頓着であったと批判している²⁶⁾。しかしながらこの作品がきっかけのひとつとなって、1869年、強制入院についての調査委員会が設立された。普仏戦争によって調査委員会が消滅したあとも、マロは『シャルロットの夫』（1874）や『母』（1890）でこの問題を描き続け、精神医学の権力に対抗した作家として名を馳せた。そして彼のもとには、精神病院に不当に入れられたとか、夫が無実の罪で逮捕されたという相談に訪れる市民があつと絶たなかったのだった。そのなかにドレフェス夫人の姿があったということも、マロの筆の力と、それに対する人々の信頼の証と捉えることができるだろう。諸事情によりマロは夫人を援助せず、ドレフェス派の先鋒にはゾラが立ち、それがもとで命を落とすことになるのも、2人の作家の奇妙な縁を物語っている。

注

- 1) しかし法案の報告者である議員ヴィヴィアンが、「危険な精神障害者たち」や「社会の安全」という言葉を使っていることからわかるように、彼らから社会を守ることもこの法律の大きな目的の一つだった。J. B. Duvergier, *Collection complète des lois, décrets, ordonnances. Règlements et avis du conseil d'Etat*, t. XXXVIII, Chez M. Bousquet, 1838, p. 493.
- 2) *Le Siècle*, 12 décembre 1864.
- 3) Henri Thulié, *La Folie et la loi*, Librairie centrale, 1866, p. 33.
- 4) Léopold Turck, *L'École aliéniste française. L'Isolement des fous dans les asiles, l'influence détestable de ceux-ci*, Baillièere et fils, 1864, p. 20.
- 5) J. Manier, *Les Bastilles modernes. De Paris à Gheel et retour par Villers-Cotterets, Chartres, et la Comission sénatoriales des étrangereurs d'aliénés*, Carré, 1887.
- 6) Léon Sandon, *Le Chemin de la liberté*, A. Le Chevalier, 1868.
- 7) Turck, *Op. cit.*, p. 10.
- 8) Hector Malot, *Le Roman de mes romans*, Flammarion, 1896, p. 32.
- 9) Malot, *Un beau-frère*, J. Hetzel, 1869, p. 347.
- 10) *Ibid.*, p. 273.
- 11) *Ibid.*, p. 336.
- 12) *Ibid.*, p. 321.
- 13) *Ibid.*, p. 266. (記号筆者)
- 14) 狂気が一人称で語られるというのはそれまでにほとんど例のなかったことであり、マロの同郷の後輩であるギ・ド・モーパッサンへの影響も指摘することができるだろう。
- 15) Malot, *Un beau-frère*, J. Hetzel, 1869, p. 269. (記号筆者)
- 16) Emile Zola, « Histoire d'un fou », *Contes et nouvelles*, Gallimard, 1976, p. 1331.
- 17) *Ibid.*, pp. 352-353.
- 18) Frederic Hemmings, « La Critique d'un créateur. Zola et Malot », *Revue d'histoire littéraire de la France*, Presses universitaires de France, 1967 (janvier-mars).
- 19) Colette Becker et Véronique Lavielle, *La Fabrique des Rougon-Macquart*, t. II, Champion, 2005, pp. 44-45.
- 20) *Ibid.*, pp. 46-47. (記号, 下線筆者)
- 21) *Ibid.*, pp. 32-33. (記号, 下線筆者)
- 22) Zola, *La Conquête de Plassans*, in *Les Rougon-Macquart*, t. I, Gallimard (Pléiade), 1960, p. 1100.
- 23) *Ibid.*, p. 1126.
- 24) *Ibid.*, pp. 1182-1183.
- 25) *Le Figaro*, 22 décembre 1878.
- 26) Achile Foville, *Les Aliénés. Étude pratique sur la législation et l'assistance qui leur sont applicables*, Baillièere, 1870, p. 72.